## 「ふくしまのいえにおいてあったたいせつなものがいっぱいあります」

7歳

「主人は『自分はここに残って、お金を稼ぎます。もし放射線が影響で死んだら、あとはよろしくお願いします』と言って、見送ってくれました」（40歳）
「三歳の娘が寝ていた枕元、毎時0・6マイクロシーベルト。その線量の値を目にして涙が溢れ出ました」（年齢非公表）

## 「生業を失い、お店を失い、住む家を失い、お金を失い、友人を失いました」

36歳

「事故がなければ、たとえ震災で被害を受けたとしても、今頃地域の方々と一緒に、一生懸命復興に取り組んでいたはずです」（43歳）
「政府の『ただちに健康への影響はない』という発表を信じ、毎日の水汲みや買い出しに追われていました」（46歳）

「妹や両親も山下氏の言葉を信じ、無用な被曝をしました」（29歳）
「お医者様はレントゲンを見て泣いたそうです」（年齢非公開）
「本来ならば、故郷である郡山市で妻子と3人での生活がスタートする予定でした」（32歳）
「この世に生を受けてまだ三日しか経っていないわが子を被曝させたくないという思いから、退院して秋田県まで避難しました」（36歳）
「情報公開により、自宅周辺がホットスポットであることを知りました」（37歳）
「避難した人もとどまる人も、苦しんで悩んで生きています」（38歳）

## 「入学式の日、新品のランドセルを背負い、マスクをして子供は放射能の中に立ちました。何てことをしてしまったのかと、今でも悔やまれてなりません」

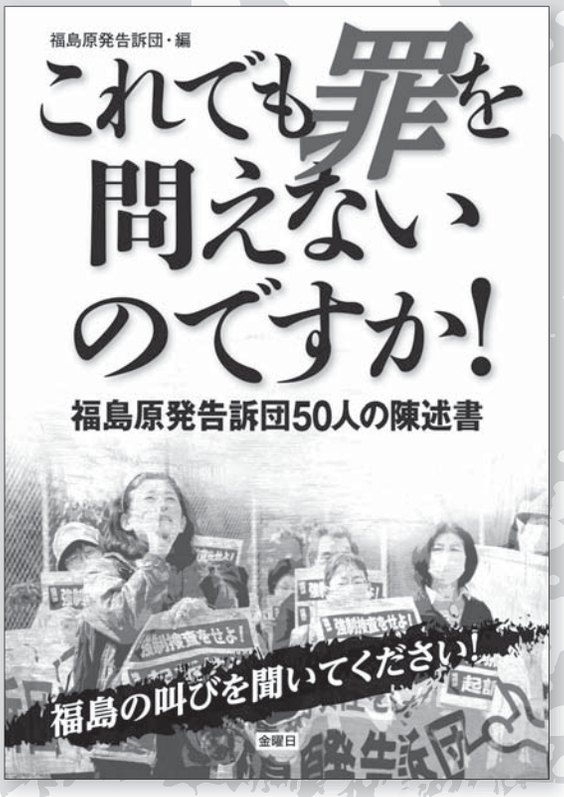
39歳

「原発事故が、生きていた人を助けに行かせず、けが人に適切な治療を受けさせず、本来の命を助ける医療をさせなかったのです」（52歳）
「子どもたちが線量計を下げて生活する姿は本当にいたましい姿です」（61歳）
「いつも美しい山々に暮らしていることが最高の自慢でした」（62歳）
「ガイガーカウンターの測定数値が100マイクロシーベルトを越えた時、家族にも本当の数値を教えられず、全身から力が抜けて、これで終わりだ、これからどうしようと悩みました」（63歳）

「東電の役員様、経産省の役人様、御用学者様。自分の家がなくなったらこまりますか？　自分のふるさとがなくなるということを考えたことがありますか？　私達はすべてのものがなくなりました」（64歳）

## 「息子は今、爆発した第一原子力発電所の中で働いて居ます。親が止めても聞いてくれません。一〇歳の娘が成人する頃までは生きられるだろうと言って、働きに行くのです」

62歳




**落合恵子**（作家）さん「まえがき」より
**――これは、「お願い」ではなく、「要求」である。**

---

**これでも罪を問えないのですか！**
**福島原発告訴団50人の陳述書**
福島原発告訴団・編

**2013年8月末、待望の刊行予定！**

定価：840円（本体800円）　発行：（株）金曜日
ISBN 978-4-906605-91-0

**【解説文】**

福島原発告訴団は2012年6月11日、最悪の「レベル7」とされた原発事故を引き起こした東京電力の幹部や国の関係者ら33人の刑事責任を問う告訴・告発状を、福島地方検察庁に提出しました。原発事故で直接の被害を受けた「告訴人」として、告訴・告発状に名を連ねた福島県民の数は、県外に避難中の人も含め、実に1324人にものぼりました。無論、我が国史上最大規模の刑事告訴です。第二次告訴は全国に拡がり、合わせて14716人が告訴・告発人となりました。

本書は、告訴・告発状に添えられて福島地検に提出された陳述書の中から50通を抜粋した、正真正銘の「告発の書」です。